沢木耕太郎著　「深夜特急」

第一便～第三便（３分冊）　　新潮社刊（1986 年発行）

作家　沢木耕太郎の若き日（26～27 歳）の放浪記である。４０年も前の旅であるが、面白く読むことが出来た。

エッセイストとして売れ始まり、次第に多忙を極めるようになって、自分の自由になる時間がもてなくなり、現実から逃避するため成り行き任せの旅に出た。手持ちの僅かな現金と 1,500 ドルのトラベラーズチェックを持って、格安航空でインドのニューデリーまで行き、そこからロンドンまで陸路バスで行くことが出来るか友人と賭けをして、証明する事を目的に出発した。

格安航空が途中２箇所の寄港を認めている事を知り、最初に香港へ立ち寄った。何処の町へ行っても最初に考える事は安宿探しである。初めての所では自分の出来る英語と身振りで探すしかない。手持ちの金を長く持たせるには安宿を探すことが肝心である。香港ではようやく見つけたところが娼婦の宿だった。初めは町を歩いても、宿に帰っても不潔感を感じていたが、このレベルに合わせる事で面白い体験が出来ることが分かってから潔癖感は薄れてしまった。澳門（マカオ）ではカジノにはまり持ち金の大半を失う危機に陥った。それでも持ち前の探究心から賭け方を研究しようやく失った旅費を取り戻すなど波乱の幕開けだった。

その後実に沢山の国を巡った。何処へ行っても安宿探しに始まり英語と身振り手振りで通用させている。あてのない旅をモットーに街中や郊外を歩き回り見聞し、その都度行く先を決め、バスを探しアジアからヨーロッパの国々を廻った。都市の名前や通りの名前、宿の名前を良く記憶して書いている。これはライターとしてメモをとる習性が身についていたのだろう。東南アジア、インド、パキスタン、シルクロードの国々など、宗教や習慣の違うところに自分を適合させながら、“なんとかなる“の精神で窮地にも慌てず、ヒッピー的旅を楽しんだ。

ヨーロッパに入り、フランスにたどり着いた後、ロンドンに向わずポルトガルのヨーロッパ西端のサグレス岬を訪れている。それもバスにこだわっての旅である。

その後彼は遂にロンドンに到達し、友人との賭けに勝ったのである。

テレビ番組でも見るが最近の日本では県境を跨ぐ路線バスがない。アジア、ヨーロッパでは国を跨ぐバスがある。今でもそうだろうか。日本では鉄道や高速バスが発達しているからだろうか。

無謀は若さの特権だろうが、私は若かった頃にも勇気がなかった。英語が出来ず、計画的な旅しか経験の無い自分から見るととても出来そうにはない。

著者は各地に数日滞在し、沢山の経験をした後「それでも、経験は物事の一面だ」と言う言葉を記している。この言葉に私も同感した。